ほやほや

Fukui Red Cross Hospital

福井赤十字病院広報誌
vol.034

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　福井赤十字病院

消化器センター・呼吸器センター開設

院内接遇表彰&受賞者インタビュー

QC活動報告

市民公開講座

スマイル

東日本大震災

救護班活動レポート

人間を救うのは、人間だ。
Together for humanity

「がんばろう！日本！」東日本大震災 福井赤十字病院 救護班 活動報告レポート

地震発生後、すぐに準備。いち早く、被災地へと出動。

3月11日(金)14時46分頃、宮城県沖でマグニチュード9.0の大地震が発生、津波で東北地方太平洋側の海沿いの町がのみ込まれました。

甚大な被害が想像され、すぐに当院でも全職員が情報収集を開始。発生から時間を追うごとに明らかになる想像以上の被害状況に誰もが驚き、「早く救護に向かわなければ！」という思いに駆られました。そして17時35分、まずは日赤福井DMAT隊が被災地に向けて出発しました。

その後、数時間後には救護班第1班が出動。以後、医師や看護師、薬剤師、助産師など、多くの職員がスケジュールを調整して被災地に向かい、現在も救護活動を続けています。

発生から約半月、日赤救護班の活動をご報告します。

田邉医師(班長)、白塚医師、内田看護師長、青山看護師、高畑看護師、山田主事、木戸主事、藤井係長が出動しました

福井日赤DMAT隊

3月11日(金)17時35分出動
宮城県仙台医療センター、小松島小学校にて活動
3月14日(月)帰院

「自分の我を出すことなく、助け合っている被災者の方々を見て、"疲れている"なんて言っている場合ではない、頑張らなければ!と気合が入りました」(木戸主事)

第1班

3月11日(金)20時15分出動
盛岡赤十字病院、陸前高田市第一中学校などにて活動
3月14日(月)帰院

正確な情報がなかなか入手できなかった初動班ながら、秋田赤十字の班長を中心に、組織を生かした活動を行いました。

日赤福井DMAT・第1班の活動

「1秒でも、1分でも早く、被災者の方々のもとへ！」とはやる気持ちを抑えながら、まずは日赤DMATの8名が出動しました。DMATとは、災害発生後からおおむね48時間以内に活動を行なう専門トレーニングを受けた、災害派遣医療チームのことです。

「福島に入った途端、暗闇の世界で、いったい日本はどうなったんだろうと思わずにはいられませんでした」と、当時を振り返る田邉医師。発生直後とあって、当然ながら電気や水道などのライフラインはストップ。そんな厳しい状況下での活動でした。

そして同日夜には、第1班が出動、現地入り。後でわかってくる被害の大きさは、その時まったく把握できない状況でした。しかし〝赤十字ネットワーク〟を生かし、少しずつ情報を入手、現状を把握しながら、被災者の方々へ、その時にできる精一杯の救護活動を行いました。

日赤救護班 Q&A

Q 日赤救護班とは？

A 日本赤十字社福井県支部所属の、災害発生時に派遣される救護チーム。準備がすぐ出来たら派遣する体制で、現地の災害対策本部の指示により活動を行います。

Q 構成メンバーは？

A 標準構成基準は、医師(班長)1名、看護師長1名、看護師2名、主事(事務)2名の計6名。ただし、救護状況に応じて増減があります。今回は、「厳しい寒さ」「ライフラインの復旧が遅い」「物流の停滞による医薬品不足」などにより被災地での医療ニーズが特に高いことから、薬剤師や心のケア要員も参加。また被災地が遠方なので、運転要員も兼ねる主事を2名から4名体制としています。

Q スケジュールなどは？

A 全国より集まる日赤救護班のスケジュールやローテーションは、現地日赤災害対策本部で決定します。

第2班

3月13日(日)17時10分出動
陸前高田市第一中学校をはじめ、市内を巡回診療
3月17日(木)帰院

「3月といってもまだまだ寒さが厳しい時期。でも被災者の方々はめげることなく、前向きな姿勢で頑張っておられました」(池田医師)

池田医師(班長)、井上(和)看護師長、川端看護師、高山看護師、青柳薬剤師、宮下主事、長谷川主事が出動しました

医師の指示のもと、限られた薬剤類で対応しなければならないので、いつも以上に専門性を発揮せねばならないという使命を痛感いたしました。(青柳薬剤師)

初動班だったので、情報がなかなか入手できないというもどかしさがありました。それでも日赤ネットワークがあり、秋田赤十字の班長を中心に、同じ目的をもったスタッフと一緒に働けたという一体感を感じ、協働できたのではないかと感じています。(井上(恭)看護師長)

黒川医師(班長)、井上(恭)看護師長、大元看護師、井上看護師、鈴木主事、坪田主事、高久課長が出動しました

第2班の活動

第2班は、現場からの要請があり、一日早い出動となりました。

第1班同様のメンバー構成に加え、今回は薬剤師も参加しました。

「限られた薬剤類を前に、いつも以上に専門性を発揮しなければならないという使命を痛感しました」

と青柳薬剤師。救護所を訪れる被災者の方々の症状は実にさまざま。医師の指示のもと、いかに的確に効率よく診察し、薬剤類を提供できるかが重要だったのです。特に多く見受けられたのは、糖尿病や高血圧などの慢性疾患の方でした。

また井上看護師長は、被災者の方々の様子を観察しながら、「今後、心のケアが本当に必要になってくるはず！」と感じたようです。

赤十字のチームワークを生かし、今、できることを精一杯に！

第3班の活動

第3班の現地入りは、震災発生からちょうど1週間目のこと。現地までの道中、吹雪と凍結に見舞われ、多少、時間を要しましたが、「少しでも早く到着して、活動したい！」との思いで、車を走らせました。

現地は津波による被害が大きすぎて、まったく手つかずの状態のようでした。そんな中、陸前高田市職員の方の案内のもと、多くの避難所の巡回診療を実施。中には車両がまったく通行できないところもあり、荷物を担ぎ、徒歩で向かった避難所もいくつかありました。

おにぎりに思いを込めて！

第3班には救護の他に、別の重要な任務がありました。実は、仙台赤十字病院院長より食糧支援SOSが届き、真っ先に応えたのが当院野口院長だったのです。入院患者さんとスタッフ用のおにぎり“2000個”をお届けしました！

第3班

3月17日（木）17時20出動
陸前高田市内を巡回診療
3月21日（日）帰院

「避難所の中には屋根しかないようなところもあり、環境レベルの差に驚くことも。今後、風や埃による感染症の増加が案じられました」（成田看護師長）

小豆澤医師（班長）、堀江医師、成田看護師長、徳橋看護師、新保看護師、新谷薬剤師、渡辺主事、小川主事、佐藤主事、藤井係長が出動しました

持病を抱え、毎日服用していた薬を失った方や、体調を崩される方が多数。そんな方々に薬剤師としてできる限りのことを頑張りました」（新谷薬剤師）

「発生から1週間ながら、ライフライン復旧も物資供給も遅れていて、被災地の方々の疲労、不安も限界に達しているようでした。疲労や不安をできる限りケアしたい、そんな思いで診療にあたりました」（小豆澤医師）

第4班

3月21日（月）13時30分出動
陸前高田市第一中学校などにて活動
3月25日（金）帰院

救護所での薬剤師業務は、想像以上の忙しさでした。しかし被災地の薬剤師会の尽力により、院外処方せんも発行されるようになり、少しずつ皆さんの手元に薬が行き渡るようになりました」（渋谷薬剤師）

第4班の活動

救護所である陸前高田市第一中学校には避難所以外からも多くの人が押し寄せ、いつしか長蛇の列に！　第4班の活動は、145名もの診療から始まりました。

風邪や感染性疾患、皮膚炎、破傷風、慢性疾患の処方切れなど、さまざまな訴えがありました。それら一つひとつ丁寧に対応するスタッフは、まさに不眠・不休。それでも、「被災者の方々の心労を思えばこれくらい大丈夫。自分にできることを精一杯、やらなければ！」と思い直し、なんとか診療を続けることができました。

ところで救護班メンバーは、医師や看護師など、医療行為を行うスタッフだけではありません。被災地までの運転や医療スタッフを支援するスタッフの存在も重要なのです。赤十字の旗の下、多部署のスタッフが力を合わせ、カバーし合うからこそ、救護活動に専念できるのです。

第5班の活動

被災地への道中、ガソリン給油に時間を要したものの、無事に到着。救護所にはレントゲン車が配置され、利用可能になっていました。

救護所を訪れる方は、感冒や吐き気、便秘をはじめ、自宅整理中に釘が刺さったなどの外傷の方も多数。さらに身の上話をじっくり聞きながらの心のケアも、以前に比べて多くなってきました。

時間が経過するうち、ケアの質が次第に変化していく中、スタッフは状況に応じた診察を行いました。

院内スタッフの思い！

スタッフの団結力で、医師不在の日々を乗り切る！

脳卒中センターからは、山手医師が救護班として参加。“本人の善意を生かしてやりたい！”と思うのと同時に、自分も何かしら支援する気持ちで、送り出しました。山手医師不在の体制を維持するのは、同センターのメンバー。彼らの何とか頑張ろうとする精神力と機動力、そしてバックアップ体制の強さを誇りに思いました。（神経内科部長 高野医師）

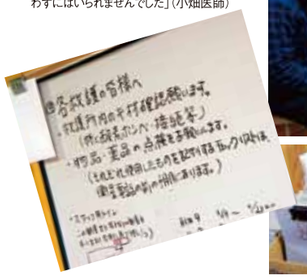
脳卒中センターのスタッフ

第5班

3月25日（金）14時00分出動
陸前高田市第一中学校などにて活動
3月29日（火）帰院

山手医師（班長）、野路看護師長、東川看護師、伊藤看護師、谷澤薬剤師、見谷主事、野村主事、吉田係長が出動しました

「日頃の業務との違いに戸惑っている私たちに、“大変やね、遠くから。ありがとう”と手を合わせてくださる被災者の方々。どうか希望を持って、いつか普段の生活に戻れますようにと、願わずにはいられませんでした」（小畑医師）



「初めは命が助かってよかったと思っていたけれど、今は先が見えなくて生きるのがつらい…」と訴える方や、慣れない手つきで奥様の代わりに幼子の面倒を見ていたり、そんな姿が目に焼き付き、心が締め付けられる日々でした」（東川助産師）

「何か支援したい、何事も経験しなければ！」との思いで救護班に参加しました。院内が忙しい中、快く送り出してくれた高野医師はじめ脳卒中センタースタッフには、心から感謝しています」（山手医師）

小畑医師（班長）、山岸医師、堀口看護師、松田看護師、西村看護師、渡谷薬剤師、三上主事、大塚主事、齋藤主事、山口救護奉仕団団員が出動しました

日本赤十字社としての活動

日本赤十字社は、地震発生後すぐに災害対策本部を設置し、被災地へ職員を派遣。現在、赤十字の組織を生かした救護活動を続けています。

活動内容は医療救護・救援の他、救援物資の提供、義捐金や救援金の募集など。赤十字奉仕団として、避難所での炊き出しも行っています。

また復興に向けて歩みだし、仮設住宅へ入居される方へ、生活家電セットも寄贈（世界各国の赤十字社を通じて寄せられた海外救援金を財源に購入）。今後も被災者の方々へ、惜しみない支援を続けていきます。

広報委員会から一言

地震発生から早1カ月。当院でも多くのスタッフが被災地への向かい、現地で救援・救護活動を行ってきました。また県内各地の地域病院のスタッフも日赤救護班として参加、現在も、活動にあたっています。

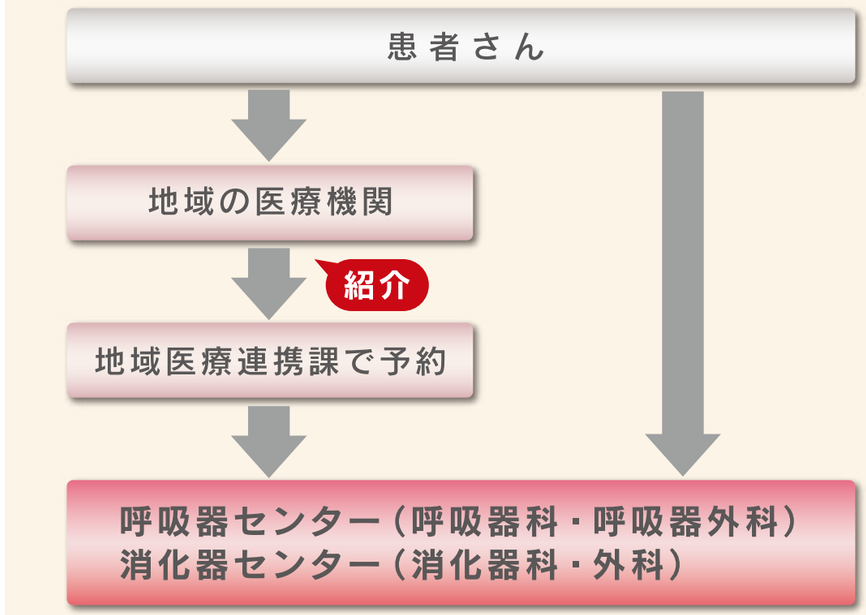
今回は約半月間の活動内容を紹介いたしましたが、それ以後のものは当院ホームページで随時報告、更新中です。また、災害救助に関する様々な情報なども紹介しております。

消化器センター、呼吸器センターが新たに開設しました。

4月1日より、「消化器センター」「呼吸器センター」を開設いたしました。

各センター開設の一番の目的は、呼吸器症状および消化器症状（胃、大腸、食道など）の患者さんが、今までよりわかりやすく安心して受診できるようということです。そしてさらに、従来の各内科系および外科系のスタッフ全員が診療科の垣根を超え、協働して最良の診療を提供していくことも目的の一つです。

各センターの特性を活かし、常に視野を広くもって患者さんに最良の医療を提供すべく、より一層の努力を続けてまいります。



※緊急の場合は、救急外来で対応いたします。

スタッフの接遇を、厳しく評価していただきました。

昨年7月～12月までの6カ月間、当院では接遇改善推進の一環として、「接遇アンケート」を実施いたしました。実施理由は、患者さんに十分な接遇ができているかを確認し、不足している点を改善、さらに皆さんから厚い支持を得たスタッフを表彰することで、さらなる業務への励みにしたいと考えてのことです。

アンケート以外にも「ロールプレイング大賞」や「電話応対美人部署」「身だしなみ美人」など院内の全部署を対象に、様々な接遇に関する試みが行われました（表彰者は左記参照）。

皆さんから回答いただいた「接遇アンケート」は、合計386通。その中で投票数の多かったのが、3-5棟の浦崎ちひろ看護師です。「ウツ寸前だったが、明るい笑顔で接していただき本当に助かった」「優しい言葉をかけてくれ、勇気と親しみを感じました」などのコメントがありました。

今回、アンケートにご協力いただいた皆さん、ありがとうございました。アンケートの結果を真摯に受け止め、全スタッフ、今後とも気持ちの良い接遇を目指します。

接遇表彰部門

ロールプレイング大賞
（接遇研修が優れていた部署）
集中治療室

接遇GOODカード美人
金賞／3-5病棟　浦崎ちひろ
銀賞／2-5病棟　渡邊加余子
銅賞／2-4病棟　西川美晴

電話対応美人部署
2-5 病棟

身だしなみ美人
医事サービス課／中田亜紀
1-6病棟／豊島鈴恵
外科外来／戸枝幸子

金賞受賞 浦崎ちひろ看護師インタビュー

笑顔とユーモアで患者さんを元気に。

看護職に就いて約5年。常に笑顔で真心を込め、誠心誠意、患者さんに向き合うことをモットーとしてきました。それが評価されたことはとてもうれしく、ありがたいことです。

勤務するリハビリ病棟では、様々な症状の方が、一日も早い回復に向けて頑張っておられます。お一人おひとりと丁寧に向き合い、訴えに耳を傾け、時にはユーモアを交えながら話をするよう心掛けています。ユーモアに関しては、暗くなりがちな入院生活の気分転換になるよう、そして明るく笑顔になっていただきたいという思いを込めての行動です。

今後もこの受賞に驕ることなく、自己向上に向けて精進あるのみ！　笑顔を忘れず、患者さんを元気づけられるよう、日々の看護業務にまい進していくつもりです。

「子どもから大人まで、誰にでも会釈をする」ことで有名な浦崎看護師。にこやかな会釈に気持ちもなごみます。

話題も豊富な浦崎看護師。ネタ元は、演技や絵画、音楽鑑賞などたくさんの趣味から。「次なる趣味はYOSAKOIです！」

QC活動発表会を開催。

さる2月19日（土）、院内で「第11回QCサークル発表会」を開催しました。

QCとは〝クオリティー・コントロール（品質管理）〟の略で、技法を用いて行う業務改善です。製造業を中心として行われる業務改善活動ですが、当院でも医師、看護師、薬剤師など、さまざまな職員が協力して知恵を出し合って「医療の質の向上」を目指し、県内病院の中では先駆けて行っています。

QC活動を進めるには、職員が各グループに分かれてテーマ（問題・課題）を選定し、それに向けて半年間に渡り、試行錯誤しながら改善活動を行うことが必要です。このQCサークル活動の集大成である成果発表会が、このQC大会なのです。

当日は、活動内容の発表はもちろんのこと、日ごろの業務中に発生する実際の問題・課題を演劇風に発表するなど、笑いあり涙ありの非常に有意義な発表会となりました。

Topics

胃がんの内視鏡治療に関する講座が開かれました。

さる3月5日（土）、平成22年度3回目となる市民公開講座を、当院講堂にて開催しました。

今回は、「こんなこともできます！胃がんの内視鏡治療」と題し、消化器科部長である道上学医師が講演。映像を多用し、この数年で大きく前進したその診断と治療法について分かりやすく説明されました。

会場には約140名の参加者が集まり、多くの皆さんから「動画による治療の状況が大変参考になった」との感想が寄せられました。

患者情報室「スマイル」を、外来診療などの待ち時間にぜひご利用下さい。

病気のことや治療方針を選択するには、患者さんご自身が病気について知ることが大切です。健康・医療情報室「スマイル」は、本館1階にあります。新聞、医学書・健康図書が約1,000冊、雑誌や小説などの一般書籍が約2,000冊、合計3,000冊の書籍を取り揃えており、書籍の貸し出しや閲覧などが自由に行えます。また、パソコンも設置されており、インターネットの利用も可能です。

外来診察が近づいた時に、スタッフが患者さんにお知らせするサービスも行っておりますので、待ち時間の有効な利用することができます。利用時間は、病院の休診日（土曜日・日曜日・祝日等）を除く午前8時半～午後5時までです。

4月6日（水）、日赤救護班第8班が出動しました

3月11日に発生した東日本大震災の被災地にて、当院のスタッフが救護活動を行っています。そして4月6日には藤井秀則医師を班長に、総勢11名のスタッフが第8班として出動しました。班長である藤井医師は外科を担当していますので、外来などで診察を受けたことがある方も多いのではないでしょうか（一般外科、消化器外科、内視鏡外科、乳腺外科）。また最近では、がん治療などでおこる様々な苦痛に対して支援する緩和ケアチームの一員でもあります。藤井医師以下11名のスタッフは、被災地の方々を癒し、励ます存在となるでしょう。

内視鏡による手術の様子
（真ん中が藤井医師）

緩和ケアチーム（下段左から2人目が藤井医師）

福井赤十字病院
〒918-8501
福井県福井市月見2丁目4番1号
TEL.0776-36-3630（代）
FAX.0776-36-4133
E-mail
webmaster@fukui-med.jrc.or.jp
http://www.fukui-med.jrc.or.jp/
広報に関するご意見、ご感想をお待ちしています。

ほやほや

“ほやほや”と納得できる情報、できたて“ほやほや”の情報をみなさまに提供していく季刊発行の院内情報誌です。院内の広報委員のスタッフ皆で毎回その季節に合った特集を組み、お役に立てる情報を掲載すべく病院各部門のスタッフそれぞれから原稿を集め誌面を制作しています。